



まる ○福連携2021

一般社団法人福祉システム北海道

高橋 銀司代表理事

福祉分野からみた異業種との対話 □連載5(終)□

有限会社Ezo'n music代表取締役・三絃道新田流2代目 新田 昌弘氏



にった・まさひろ 札幌市出身。新田流家元の父に影響を受け、14歳から津軽三味線を始め、学生時代からさまざまな大会で優勝。独自のテクニックでさまざまな楽器とコラボレーションし、津軽三味線の魅力を発揮する「コラボ三味線奏者」としても活動。舞台音楽の作曲・編曲、映画出演等活動は幅広く、国際芸術祭など世界各国で演奏するほか、公益財団法人日本青少年文化センターの要請で15年余、全国各地の小中学校で公演。道内では学校公演をはじめ、和POP音楽団「Ezo'n」をプロデュースし、古典的楽曲をアレンジして若い世代に向けた音楽を発信している。

ように僕らがプロになった理由を話したりしますね。僕の場合、「中学時代に体操をやっていたけど、体操を辞めて三味線を始めた。中学校で自分の人生を選んだんだよ」と話しています。もしかすると君たちがいま夢中になっていることは、実は将来の一生の仕事になるかもしれない。一生懸命頑張っしてほしいと伝えたいし、大事だなと思っています。これまで世界中に発信することは結構してきましたし、今もしていますが、これからはどちらかという次世代への発信を意識しています。新型コロナでなければ、皆さんの施設

●三味線に触れたのはいつですか。

父が家元で、小さいころから姉が弾いていた、家族の演奏が自然と耳に入ってくる環境でした。私はというと中学時代、器械体操に夢中でした。全国大会までは進めたものの、下から2番目の結果に当時はショックを受けて挫折してしまいました。何か違うことをやろうと、何げなく三味線に触ってみたときに「面白いな」と感じたのがきっかけでした。それまで三味線には興味がなくて、1回も触ったことがなかったんですよ。中学3年生で三味線を始め、7カ月後には大会で優勝していました。そして高校生では既に三味線の仕事をしていました。大学進学も考えましたが、父親に「三味線の道に来たらどうだ」と言われ、「これ一本で生きていくんだ」と三味線で生きていく決断をしました。

●仕事の中で福祉、介護を感じることはありますか。

介護施設へ演奏に行くことが多かったので全面的に感じています。おじいさん、おばあさんたちに喜んでもらえて、「また来てね」「寿命が5年延びたわ」と声を掛けてもらえてやりがいも強く感じます。それだけでなく、「利用者さんたちが楽しめる時間がとれた」とスタッフの方々の笑顔がとても美しいと思います。演奏に行くと、利用者の皆さんからアイドルのように見られます。とても楽しみにして待っていてくれたんだろうなというのが伝わってきます。三味線の音は、難聴の方でも比較的聴こえやすい周波数なんです。なので、三味線を弾き始めると、寝ている利用者の方が目を開けたり、体を動かしたりすることがかなり多いですね。

●どういう状態の利用者さんたちが多ですか。

本当にさまざまですが、活発な方たちの多い施設、皆さん座って静かに聴いてくださる施設、ベッドを並べて皆さんが寝た状態で聴かれているときもあります。車いすの方も多いですね。お年寄りの人たちにとって三味線の音は大きなエネルギーになるようで、その日一日アドレナリンが出ていたのか、「夜は寝なくて大変だった」とスタッフの方から聞いたこともありました。施設によって演奏に行く頻度はバラバラですが、年間2回、3回も行くことはあまりないですね。

●利用者さんにとっては特別な時間ですね。

そう感じていただけているようですね。私は「おばあちゃんっ子」だったんですよ。幼い頃から両親は忙しくて、小学校時代、ずっと夜は僕1人でした。なので、家の下の階に住んでいる祖母と過ごす時間が多かったですね。そういう意味では自分が施設で演奏する意味はすごく感じています。自分の祖母を思い出して、良い演奏をして、記憶に残ってもらえるように頑張ろうと常に思っています。

●演奏はどういうチームで行くんですか。また、料金の相場など。

だいたい三味線と歌、民謡の歌の2人などです。あとは三味線2人だけで行くこともあります。音響、機材も全て自分たちで調整します。予算によって人数は変わりますが、大体は2人

で行って、施設側で音響がついていたらその音響を使わせてもらうという感じです。地方コンサートの際は、「ついでにうちの介護施設にも寄ってくれないか」と言われて何うこともあります。演奏の相場は大体の介護施設だと、1人3万円の2人で6万円くらいです。大体30~40分くらいがお年寄りにとっても、体力的にちょうどいいんですね。演奏後は写真を撮ったりもします。活動範囲は基本的には道内です。フリーで活動していた頃は全国でも行っていて、学校など年間70公演くらい。現在は会社として道内だけでやっています。結構、民謡と福祉関係がつながっている人も多いんですね。民謡をやっている女の子が福祉に進んで、「施設で利用者さんたちに民謡を歌っています」という話を聞くことも多いです。基本的に民謡をやっている方は若いときから高齢者と接する機会が多いので、接し方が上手だったりします。そうした関わりが得意で介護に進んでいく子が多いです。重度の方が多い施設にも行きますが、三味線の曲で皆が知っている曲や子供たちが知っている曲を演奏するとすごく喜んでくれましたね。体中にエネルギーがあふれている様子を見られました。音楽って素晴らしいですね。

●今後の目標を教えてください。

道内で和楽器や民謡などを盛り上げていく第一人者的存在を目指しています。現在、日本の民謡分野は少しずつ陰りが見えてきています。触れる機会も少ないですし、辞める子も多い、プロになる子はほんの一握りです。なので、この仕事の魅力を子供たちに伝えていきたいと考えています。学校公演の時は、少しでも興味を持ってもらえる



▲施設での演奏や三味線について説明する新田氏▼



■あとがき：高橋銀司

耳で聴く、口から歌う、膝でリズムを取るなど、音楽の楽しみ方はさまざま。私たちは曲を聴いたり、歌ったりすることが当たり前ですが、耳が不自由でも、しゃべることができない人でも、周りの様子や音、振動を感じ、リズムを取って演奏に参加することもできます。そうしたセッションの時間を過ごしていれば、「みんなで音楽を楽しんでいる」ということになると思います。日本音楽療法学会によれば、音楽には人の生理的、心理的、社会的、認知的状態に作用する力があるそうです。

対談後、新田さんの演奏を聴かせてもらいましたが、対談中の丁寧で穏やかな雰囲気、津軽三味線を手にとると、一気に表情も引き締まりオーラを感じました。新田さ

んは「高齢者施設などで演奏するとき、皆さんが本当に喜んでくれることがうれしいですし、感謝しています」と話します。高齢者や障害のある方も含め、「皆さんに楽しんでいただきたい」の思いの中には、津軽三味線を通して、人を明るくしたいという強い気持ちが込められていると感じました。

昨年に引き続き、○福連携にお付き合いいただき、ありがとうございます。福祉従事者にとって、異業種というのは連携先になる一方、利用者の方がこれまで勤めてきたお仕事や楽しんでいる趣味である分野だったかもしれません。各分野の知識を得ることで皆様の関わる利用者の方との関わりの一助になれば幸いです。これからも福祉システム北海道はたくさんの方々とはコラボレーションし活動していきたいと思っています。